

MICHELLE

76/45

DOR-0092
DAM

SIDE 1

1. サムシング Something (3' 57")
2. ミッシェル Michelle (4' 49")
3. 抱きしめたい I want to Hold Your Hand (2' 46")
4. ノルウェーの森 Norwegian Wood (3' 16")

SIDE 2

1. a) 合唱のためのコンポジション第4番「子供の領分」より ゆかいなうた・絵かきうた
b) 「東京のわらべうた」より おじぎのまえに
c) 「東北地方のわらべうたによる九つの無伴奏女声合唱曲」より ほたるこい (8' 02")
2. アヴェ・マリア Ave Maria (2' 16")
3. 八木節 (2' 49")
4. 小諸馬子唄 (3' 41")



新ヴィヴァルディ合奏団

指揮：早川正昭

ヴァイオリン：外山 滋

尺八：山本邦山

東京荒川少女合唱隊

合唱指揮：渡邊顯彦

制作にあたって

日頃は第一家庭電器を御愛顧いただきまして誠にありがとうございます。

DAM恒例の「マニアを追い越せ大作戦」も今回で丁度15回を迎えることができましたのも、ひとえに会員の皆様のご支援の賜物と深くお礼申し上げます。

さて15回記念のDAMオリジナル録音第9作は、各社から楽しいレコードが多数発売されている、早川正昭氏率いる新ヴィヴァルディ合奏団の演奏を中心に、誰でも知っているメロディで、心から楽しめるアルバム「MICHELLE 76/45」を企画いたしました。

今回の大きな特徴は、作曲家としても有名な早川氏に、オーディオ・チェック・レコードに、よりふさわしいもの、ということで、通常の弦楽器の編成に加えて、管楽器、打楽器等を加え、20名編成による、ビートルズの「ミッシェル」「サムシング」2曲のDAMオリジナル・アレンジをお願いしたことです。

又、今回は、より美しい音を、自然な臨場感で再現できるよう、ワンポイント・マイクでの収録をメインにいたしました。

4月16日、弦の響きが良いといわれている木を多用した杉並公会堂で、オリジナル・アレンジの「ミッシェル」「サムシング」、それに通常の弦楽器だけの「ノルウェーの森」の3曲のレコーディングが無事終了。

続いて、4月29日、石橋メモリアルホールで、早川正昭氏～新ヴィヴァルディ合奏団の他に、渡邊顯彦氏～東京荒川少女合唱隊、ヴァイオリンの外山滋氏、尺八の山本邦山氏をゲストに迎え、「第3回春一番！ジョイフルコンサート」が開催されました。

とにかく、コンサートとしてはあまり他に例をみない多彩なプログラムで、I部は、弦楽器を中心に、パイプオルガンを加えたオーソドックスなクラシック、II部は、子供達の一条乱れぬ素晴らしい熱唱、III部は、山本邦山氏の尺八と合奏団の息のあった、日本民謡とビートルズの楽しい演奏に、満員のお客様の鳴りやまぬ拍手。3曲のアンコールが終了し、合唱隊の子供達の最後の一人が退場するまで半分近くのお客様が暖かい拍手を送ってくださった程の感動を呼んだコンサートでした。

この多彩なコンサートを45回転レコード30分に、どのように収めるかということで、関係者一同、多に悩んだ結果、A面をビートルズで統一し、B面は、全て4月29日のコンサート曲目の中から選ぶことにした次第です。

それぞれの曲について詳しくは、早川氏と池田ミキサーの別項の記事をお読みいただくとして、今回のDAM45は、バラエティに富んだ、文句なく楽しいレコードが完成したと自負しております。

更にオーディオ的には、ワンポイント収録による多種の楽器が、ナチュラルで、プレゼンス豊かに再現できるかどうか、リアルに定位するかどうか等がチェック・ポイントとなりましょう。

特に、尺八、チェンバロ、チェレスタ、スターチャイム等の楽器や、児童合唱等、DAM45に初めて登場するのは、オーディオ・マニアにとって興味深い音源といえます。

なお、カッティングに際しては、76cm/secのマスター・テープから、リミッター等を一切使用せずにストレートに、ハイレベル・カッティングしたため、一部のカートリッジでは再生しにくい箇所があるかも知れませんが、あらかじめ御了承ください。

なお、レコード制作にあたり、早川氏をはじめ、演奏者の方々、並びに、多くの関係各位に、多大な御協力をいただきましたことを厚くお礼申し上げます。

最後に、本アルバムが、会員の皆様のお愛聴盤として、末長くご利用いただければ幸いです。DAMといたしましても、更に今後、皆様に満足していただけるようなソフトの開発に努力いたしますので、よろしくご支援のほど、お願い申し上げます。

DAM推進委員会



新しい編曲について

早川正昭

私が今までに聞いたことのあるポピュラー系の音楽の中では、ビートルズが、最も色々な変形に耐えられる程の良さを持っていると思う。

今回のレコードのために新しく編曲した「サムシング」と「ミッシェル」の2曲は、シンフォニックな効果を狙ってみた。

シンフォニックな効果は、大編成のオーケストラで演奏すれば自ずとそう聞こえるものだが、11人の弦楽器5人の管楽器その他を合せても20人足らずの小編成で、大編成並みの音の感じを出すには、かなりの工夫が要る。オーケストレーション（管弦楽法）の分野は、私が最も得意とする領域なので、大いに張り切ってスコア（総譜）を書いた。

シンフォニックなサウンドの長所は、空間的な広がりを大きく表現できるということである。

「サムシング」では、冒頭のホルンで代表されるような、明るく、広い大自然（山でも海でも草原でも良い、聞く人の想像におまかせする）を表現してみた。勿論、昼の明るい日ざしの中である。このレコードは、オーディオ・チェック用、あるいは、デモンストレーション用の役割も兼ねるので、この曲では、ダイナミック・レンジを広くとるような編曲にした。ジョージ・ハリスンの傑作が、原曲とは異った、広い場所に出て来た感じをわかっただけであればうれしい。

「ミッシェル」では、同じ大自然でも、夜の世界を表現した。広大な宇宙の無重力の世界で遊泳するのも良いし、夢の世界に遊ぶのも良いだろう。私の考えたのは、先年惜しくも亡くなったジョン・レノンと、ポール・マッカートニーの合作による傑作が、天界の音楽の如く、遙か遠い空間から響いて来るようなイメージであり、ヴァイオリンのハーモニクスや打楽器による高域、コントラバスの最低音など、フリークエンシー・レンジを広くとるように考えて編曲したのである。原曲の持つ夢幻的な味わいを拡張してみたつもりであるが、貴方はどうお聞きになるだろうか？

このレコードの、他のビートルズは、殆んど弦楽器だけの、更に小さい編成であるが、チェンバロによって、シンバルとギターの両方の役を兼ねている点が新しい工夫である。

どんな形態になっても、ビートルズの良さは失なわれていないと思う。クラシックを専門とする我々も、ビートルズは、心から共感しつつ演奏できるのである。



レコードというのは、生の演奏と比較して、視覚的要素に欠けるという点で、大きなハンディキャップを負っているのであるが、逆に、これが聴く人の想像力を自由にはばたかせるという長所にもなっている。

私がレコードのために編曲しながら、いつも心掛けていることは、聴く人の想像力を大きくふくらますという事である。

編曲には、大きく分けて二種類ある。例えば、ピアノ曲をオーケストラに直すという、単に編成や演奏形態を変更するものがその一つであり、もう一つは、ある短いメロディーをもとにして、一つの楽曲にまで発展させるものである。

後者の場合、ただ単に楽器を代え、音色を変えてくり返すだけでは良い編曲とはなりにくい。そこに一つのイメージがあって統一される、ということが、良い編曲のための一つの秘法であると私は考えている。

ジャズになったり、電子音楽になっても立派に通用するバッハの例を見てもわかるように、優れた音楽的素材というものは、どのような形に変えられても、その良さは失なわれないものである。

新ヴィヴァルディ合奏団について

新ヴィヴァルディ合奏団は、20年近く皆様に親しまれて来た、東京ヴィヴァルディ合奏団を離れた主要メンバー7名が、昭和54年10月、優秀な奏者を加えて新しく結成した合奏団で、作曲家でもある早川正昭氏を常任指揮者とし、ソリストに外山滋氏を擁し、その素晴らしい演奏は各方面で人気を博している。ヴィヴァルディやバッハなどバロック音楽から、古典派、ロマン派、現代音楽に至る広いレパートリーを中心に、かつ、日本人の作品を積極的にとりあげ、ヴィヴァルディ賞コンクールを主催する等、意欲的な活動が高く評価されており、さらに、早川氏の編曲による、「日本の四

季」や「ビートルズ」「日本民謡」などを加えた親しみ易いプログラミングは、他の団体の追従を許さない。

昭和56年4月より、毎週土曜日朝8時からテレビ朝日にレギュラー出演する他、各地からの演奏依頼も多く、日本を代表する室内合奏団として、ゆるぎない地位を築きつつある。演奏の特色としては、生き生きとした音楽作りや非常に楽しい雰囲気や、4台のグワルネリや、ゴフリラー、ガリアノ等、多数の名器を使用しており、音色の美しさには定評がある。



出演者(新ヴィヴァルディ合奏団)	指揮 早川 正昭	ヴァイオリン 吉井 雅子
	ヴァイオリン独奏 外山 滋	ヴィオラ 荒木 信子
	ヴァイオリン 内田 輝	ヴィオラ 板倉 均
	ヴァイオリン 山中 光	チェロ 飛山 宣雄
	ヴァイオリン 宮内 道子	チェロ 寺井 庸裕
	ヴァイオリン 福森 隆	コントラバス 今村 晃
	ヴァイオリン 長谷部雅子	チェンバロ、チェレスタ 土屋 律子

早川正昭(指揮・編曲)

東京大学及び東京芸大作曲科卒。作曲を長谷川良夫氏、指揮を渡辺暁雄氏に師事。

1961年ヴィヴァルディ合奏団を結成し指揮者をつとめたほか、都響、日フィル、東フィルなど数多く客演、また、東大オーケストラの名誉指揮者として長く指導し演奏水準を高めた。

71、73、77年にはヴィヴァルディ合奏団と欧州公演を行い激賞されている。

78～79年ヨーロッパにて研修。作曲家としても、「レイクエム・シャーンティ」「祈り」など、むしろ海外で演奏される機会が多く、西独で作品も出版されている。

名古屋音楽大学教授。

日本指揮者協会、日本作曲家連盟、日本現代音楽協会各会員。



外山 滋(ヴァイオリン独奏)



幼少の頃より、アレクサンダー・モギレフスキー氏に師事。18歳で楽壇にデビュー、N響のコンサートマスターに就任。

その後、ソリストとして活躍、ABC響の独奏者として渡欧、70年からは、ヴィヴァルディ合奏団の独奏者に就任、71、73、77年のヨーロッパ公演の他、毎年のように呼ばれてリサイタルを行っている。室内楽や指揮も手がけるなど多彩な活動を続けている。又1980年バガニーニ国際コンクールの審査員に招かれている。

日本指揮者協会会員。東京芸大講師。

使用楽器 ジョセフI世グワルネリ。

山本邦山(尺八独奏)

1946年初代山本邦山、中西蝶山師に尺八を学ぶ。58年京都外語大英文科卒業。62年正派音楽院楽理科卒業。

海外での演奏は、58年バリの世界民族音楽祭、ロンドン公演・BBC放送、イスラエルのエルサレム音楽院にて演奏、66年ロンドンでレコード録音と、リサイタル、ニューポート世界ジャズ・フェスティバル出演。

リサイタル、レコード録音、放送、作曲、各地出演、尺八教則本出版、そして民族音楽の会、尺八三本会の結成等々で多忙なかわら、国際音楽会議等にも出席。74年度芸術選奨受賞。

主な作曲作品は、尺八二重奏曲〈竹〉(東京新聞主催邦楽コンクール作曲部門第一位、NHK優秀賞、日本三曲協会賞)、〈緩急〉〈尙越〉(芸術祭優秀賞)、〈韻〉(芸術祭優秀賞)。





①内田 輝(コンサート・マスター)

東京芸大卒。西ドイツ国立ケルン音楽アカデミー・マイスターコース終了。芸大在学中に安宅賞を受賞。卒業後クリティック・クラブ新人賞を受賞。72年よりヴィヴァルディ合奏団コンサートマスターとしてヨーロッパ公演に参加した他、大阪フィル、東京フィルなどと協奏曲を協演。77年より、西ドイツ、ゾーリンゲン市立交響楽団コンサートマスターに就任。放送、レコード、演奏会にて独奏者としても活躍、79年帰国、リサイタルや協奏曲のソリストとして活躍中。

使用楽器 Andrea Guarneri 1668

②山中 光(ヴァイオリン)

東京芸大卒。高杉忠一、久保田良作、兎東龍夫、山岡耕符の各氏に師事、芸大在学中に安宅賞を受賞。76年よりヴィヴァルディ合奏団メンバーとして各地で活躍、ヨーロッパ公演にも参加、第二ヴァイオリンのトップを務めるほか、協奏曲のソリストとして数多くのオーケストラと共演。毎日コンクール入選、文化放送音楽賞受賞。現在、イソ弦楽四重奏団のメンバーとしても活躍している。

使用楽器 Matteo Goffriller 1726

③宮内 道子(ヴァイオリン)

桐朋音大卒。宗倫安、ジャンヌ・イスナール、齋藤秀雄の各氏に師事。毎日学生コンクール入賞。69年、桐朋学園ヨーロッパ公演に、73年ヴィヴァルディ合奏団第二回ヨーロッパ公演に参加。77年から79年にかけて、西ドイツにて、室内楽を中心に演奏活動を行い79年帰国した。

使用楽器 Pietro Guarneri 1739

④福森 隆(ヴァイオリン)

9才からヴァイオリンをはじめ。武蔵野音大では、磯良男、ケーニッヒ両氏、室内楽をグレラー、勝田聰一、指揮法をクルトヴェス、甲斐正雄の各氏に師事。クラシックからタンゴ、ロックまでこなす多彩な活躍をしている。

使用楽器 Michèle Deconet 1737

⑤長谷部 雅子(ヴァイオリン)

4才よりヴァイオリンをはじめ、平井淳衛、篠崎弘嗣、久保田良作、鷺見三郎の各氏に師事。第24回全日本学生音楽コンクール入賞。桐朋音大にまなぶ。1977年第12回民音コンクール室内楽の部入賞。1979年9月から1年間ウィーンへ留学し、ヴァルター・バリリー氏に師事。

使用楽器 Andrea Guarneri 1664

⑥吉井 雅子(ヴァイオリン)

6才よりヴァイオリンをはじめ。石井洋之介、鷺見健彰、鷺見三郎の各氏に師事。室内楽を齋藤秀雄氏に学ぶ。学生音楽コンクール西日本、中学の部で第1位入賞。桐朋学園高校から桐朋音大を経て、東京フィルハーモニー交響楽団に入団したが、現在は、室内楽を中心に活躍している。

使用楽器 Mathéus Albani 1650

⑦荒木 信子(ヴァイオリン)

桐朋音大卒。西ドイツ国立ハイデルベルク—マンハイム音大入学、リングベルク教授に師事。西ドイツ音大生コンクールにて、独奏部門第1位、室内楽部門第2位受賞。同音大卒業後、同音大講

師をつとめるかわら、弦楽四重奏団を結成してヨーロッパ各地で演奏。レオニード・コーガン氏の夏期講習に参加、帰国後、独奏、室内楽の分野で活躍。現在、東京音大講師。

使用楽器 Giuseppe Antonio Gagliano 1843

⑧板倉 均(ヴァイオリン)

6才からヴァイオリンをはじめ。武蔵野音大でヴァイオリンを磯良男氏に師事。1972年9月から73年7月まで東フィルの首席ヴァイオリン奏者をつとめ、73年9月からドイツへ渡り、ロイトリンゲン市立交響楽団に5年間入団。エンリック・サンチアゴ氏に師事。1979年帰国。1980年リサイタル開催。ソロや室内楽を中心に活躍している。

使用楽器 A.Delanoy 1880

⑨飛山 宣雄(チェロ)

東京芸大卒。同専攻科修了。広田幸夫、カプチンスキーの両氏に師事。70年3月まで、東京芸大講師を務めた。ヴィヴァルディ合奏団創立時からのメンバーで、約20年間、チェロのトップ奏者を務める他、協奏曲のソリストとしても多くの交響楽団と共演、リサイタルも行っている。71年73年77年と、ヴィヴァルディ合奏団のヨーロッパ公演に参加、オーストリーでは、ヴィヴァルディのチェロ協奏曲のソリストとして電波に乗った。

使用楽器 N.F.Vuillaume 1860

⑩寺井 庸裕(チェロ)

東京芸大卒。同大学院卒。菊地俊一、堀江泰氏、三木敬之、レイヌ・フラショーの各氏に師事。77年よりヴィヴァルディ合奏団メンバーとして各地で活躍、その他室内楽・アンサンブル活動に意欲を見せ、現在、イソ弦楽四重奏団のメンバーでもある。

使用楽器 Andre Castagneri 1737

⑪今村 晃(コントラバス)

東京芸大卒。今村清一、江口朝彦の両氏に師事、67年よりヴィヴァルディ合奏団メンバーとして各地で活躍。71年ヴィヴァルディ合奏団の第一次ヨーロッパ公演に参加。76年から77年にかけて、文化庁在外研修員として西ベルリンに派遣され、ベルリン・フィルの首席奏者、ライナー・ツェパリッツ教授に師事。現在、東京都交響楽団のコントラバス首席奏者。

使用楽器 W.Jaura 1838

⑫土屋 律子(ピアノ・チェンバロ)

桐朋音大卒。音楽賞を受賞。その後室内楽、伴奏等を中心に演奏活動を続けている。土肥みゆき、松野景一、大島正泰の各氏に師事。ロッテルダム・フィルハーモニーの日本公演に参加、東京都交響楽団、桐朋音大オーケストラなどとも協奏曲のソリストとして共演している。

⑬千葉 直師(クラリネット)

昭和45年東京芸大卒。同時に東京都交響楽団に入団。昭和46年9月オーストリー国家国費留学生としてウィーン国立アカデミーに入学。R.イエッテル、A.プリンツ氏に師事。昭和49年ウィーン国立アカデミー卒業と同時に帰国、東京都交響楽団に再入団。昭和54年NHK交響楽団に入団。

使用楽器 ブュッフエ・クランボン

⑭霧生 吉秀(ファゴット)

昭和41年東京芸大大学院修了後アメリカに2年間留学。三田平八郎、レオナード・シャロウ氏に師事。第34回音楽コンクール管楽器部門第1位。現在NHK交響楽団メンバー。東京音大講師。国立音大講師。

使用楽器 ヘッケル

⑮木村 茉莉(ハープ)

昭和40年パリ国立音楽院卒。昭和38年~44年フランス留学。ヨセフ・モルナル、ジェラルド・ドゥヴォス氏に師事。昭和44年日本フィルハーモニーに入団。その後、新日本フィルハーモニー結成と同時に入団。現在は新日本フィルハーモニーを退団し、アンサンブル「ヴァンドリアン」のメンバーとして活躍中。

⑯松崎 裕(ホルン)

東京芸大卒。在学中から新旧フィルに在籍、昭和50年、西ドイツ・ミュンヘン・リヒャルト・シュトラウス音楽院卒。在学中よりバイエルン国立歌劇場管弦楽団に在籍、帰国後NHK交響楽団に入団。

使用楽器 アレキサンダー

⑰今村 三明(パーカッション)

昭和43年東京芸大打楽器科卒。小宅勇輔、ウェルナー・テリヒェン(ベルリン・フィル首席テンパー奏者)氏に師事。卒業と同時にNHK交響楽団に入団、現在に至る。作陽音大講師。東京パーカッション・グループ(今村三明パーカッション・グループ)リーダー。

使用楽器 ラディック

⑱宮本 明恭(フルート)

東京芸大を経て、昭和38年ブラーハ音楽院卒。昭和33年~39年チェコスロバキア、スイスに留学。吉田雅夫、アンドレ・ジョネ氏に師事。第26回音楽コンクール管楽器部門第1位。現在、NHK交響楽団メンバー。山形大学、国立音楽大学、日大芸術学部講師、NHK学園講師。

金のフルートを使用。

⑲似島 健彦(オーボエ)

東京芸大卒。ユルグ・シェフトライン、梅原美男氏に師事。現在、NHK交響楽団メンバー、玉川大学講師。使用楽器「デュバン」は日本に5本しかない楽器。今年11月にはR.コルサコフ「吹奏楽とオーボエの為の変奏曲」を本邦初演の予定。

東京荒川少年少女合唱隊

《心でうたいあげる合唱芸術》をとり1965年11月3日に発足。合唱音楽のふるさとをたずねてグレゴリオ聖歌やミサ曲を学び、そして日本人としてゆたかな《こころ》をはぐくむために、日本人の手による日本のうたを勉強している。メンバーは都内50校から集まっている。ジュニア、ミドル、シニア、コーロ・ファンタジアと4つのグループで構成されている。練習は毎週火曜日、水曜日と日曜日の3回、またいろいろな演奏を聞いて勉強する《見学勉強会》も行っている。



渡邊顯磨(合唱指導)



1931年、青森に生まれる。大谷大学で原始仏教学を、東大大学院と東洋大哲学研究室でインド哲学を専攻。小山誠之氏・瀬川晶子氏・林達次氏・木下保氏・中川牧三氏・本田しろき氏に師事。

1956年に東洋大混声合唱団を、ついで57年に吹奏楽研究会を発足。

1961年より1977年まで荒川区立第九中学校に英語教師として勤務。

同校グリーンクラブ・東京都教員演奏研究会合唱団とそのオーケストラ、アメリカ文化センター合唱団の指導者として活躍。

現在、東京荒川少年少女合唱隊、東京男声合唱団、親子の合唱団ノイホフ・クワイアー、釜石混声合唱団、常任指揮者。



インタビュー：五十嵐由美子

ドキュメント 4月29日

春一番 Joyful Concert



4月29日 AM 9:00

ここは、上野、石橋メモリアルホール。人っ子一人見当らないシーンと静まり返ったホールの前で、まずは大きく深呼吸。実は私め、始めてのクラシックコンサートという事で、心静かではいられない。と、何やらホールの一隅でガタガタ、ゴトゴト、おまけに誰かさんの怒鳴声。あれは一体、何なんだ？ 首をかしげて見廻すと、ズズッとコードが動いてる。ふむふむ、このコードを辿って行けばと一段一段階段を昇ってゆくと、大きな機材が右往左往。成程、東芝EMIのスタッフが少々慌て気味に録音機材をスタンバイ中。こういう時は、皆さん熱くなっているので、邪魔になってはいけません。そっと片隅でセッティングを眺める事にしました。スチューダールのミキシング卓にテープレコーダー、まるで、スタジオそのまま移動させたみたい。ライブ録音って大変なんだなあ。なんて思っているうちにも第一家庭電器の関係者の方々が次々に現われては、忙しそうに消えてゆきます。PM6:30開演のコンサート、こんな朝早くから舞台裏は大忙し。



AM11:30

スタッフ全員集合命令。それぞれのポジションで働いていたスタッフが一同会して、コンサートの段取り、進行について打ち合わせ。皆、素晴らしいコンサート、ライブ録音にする為に真剣な表情。

PM12:00

俄に、控室の方が活気を帯びてきました。コロコロとソプラノの可愛らしい子供の笑い声が響きます。そう、荒川少年少女合唱隊のメンバーが集まってきたようです。ちょっと控室を覗いて見ましょう。あらっ〜お揃いの紺色の制服姿の子供達が、ざっと60人位。皆、お行儀よく並んでますよ！正面でこやかに話しかけているのが合唱隊の指揮者、渡邊顯磨さんかな？ そろそろ練習が始まる様ですから、後程、お話しを伺うことにして、ここは一まず退散。



PM 1:00

“おはようございます！” “おはようさん” 楽器のケースを片手に、さっそうと新ヴィヴァルディ合奏団のメンバーの方々が控室に入ってきます。1人、2人、全部で13人。そのうち、5名が女性です。



PM 2:00

そろそろ打ち合わせの時間なんだけれど……（ドキドキ）
“トントン”。スラット背の高い素敵な紳士がこやかにドアの向うから現われました。新ヴィヴァルディ合奏団の指揮者、早川正昭さんです。ほらっ、クラシックの指揮者の方って、何となく怖そうに見えませんか？ 本当はとっても不安だったんだけど、思わず引き込まれてしまいそうな温かな笑顔を見た瞬間、肩の重みがスーッと消えてしまいました。まずは、曲順や進行の打ち合わせを……その後、お話しを伺いました。

由美子 指揮者になる為には、何か特別な勉強が必要なんですか？

早川 音楽学校では指揮法というものを教えますが、それを習っただけでは駄目なんです、よく飛行機の操縦士が滞空時間、何時間というでしょ！あれと一緒にね。経験が大切なんです。オーケストラの前で何時間、棒振ったという。

由美子 もし、私の様なシロウトが棒振ったらどうなりますか？



早川 曲によっては指揮を見なくてもコンサートマスターの合図だけで演奏できるんですよ。バロック時代は指揮者が居なくて、コンサートマスターが立って合図したり演奏したりしていたんですけど、その後、音楽が色々複雑になってきて、合わせきれないというので指揮者ができたんです。だから、昔の簡単な曲や、現代のポピュラーでも単調なものだったら、あなたでもできますよ！

由美子 そうですか。早川さん御自身は何か楽器を演奏なさいますか？

早川 僕はほとんど全部。全部というのはおかしいけれど、自分の年の数だけ。今、47歳ですから、47種類ぐらい演奏しますよ！プロとしてやったものだけでも14種類かな？

由美子 えっ〜そんなにたくさん楽器の種類があるんですか？

早川 民族楽器なんて、実に多くありますから死ぬまでやれるなあ。

由美子 ところで、今日はビートルズの曲をアレンジして演奏なさるそうですが。

早川 ええ、シンフォニックな感じにアレンジしてみました。他にも、バロック風にアレンジしたりもするんですがね。

由美子 これからは、どんなお仕事なさりたいですか？

早川 作品としては、ソプラノと弦楽合奏のモノオペラ、1人で演ずるオペラを書こうと思います。アレンジより、作曲が本業ですから…。この後、早川さんは、足ばやに、リハーサルに行かれました。



PM 2:30

この頃、ステージ上では、新ヴィヴァルディのメンバーの皆さんが音合わせをしていました。そこでコンサートマスターの内田さんにインタビュー。

由美子 コン서트マスターってどんな事なさるんですか？

内田 まとめ役。ファーストヴァイオリンの一番前に坐って、音合わせをしたり、演奏中に合図送ったり、指揮者と同じ仕事。何でも屋ですよ。

由美子 内田さんは、いつ頃からヴァイオリンをおひきになってらっしゃるんですか？

内田 弦楽器は早いうちからやってる人が多いですよ！僕は3歳の時から始めて、ヴァイオリン一筋30年。他にも唄とか指揮法とかやったけど、やっぱりお薦め品はヴァイオリンだな！
とっても温厚でいかにもまとめ役びったりという感じの方でした。



ドキュメント 4月29日

春一番 Joyful Concert



PM 4 : 30

場面変って、こちらは控室。尺八独奏の山本邦山さんはどこかな…？
あらっ？ 思わずパンフレットとお顔を照らし合わせてしまいました。
なんとダンディーな洋装です。

由美子 今日はお洋服で演奏なさるんですか？

山本 ええ、洋服の方が気楽に演奏できるんですよ。着物の方が緊張しますねえ。

由美子 尺八にはどんな種類があるんですか？

山本 五孔、七孔、九孔なんて多孔尺八もあるんですが、昔からの五孔が不合理だけれど表現力豊かに自由に吹けるんです。僕としては五孔が最も完成された楽器という気がしますね。

由美子 今後はどんな活動をなさりたいですか？

山本 クラシック、ジャズ。好きなものをどんどんやりたいですね。プロになってからでも30年経ちましたから、今後いいチャンスがあったら、積極的にそれを掴んで行きたいな、それが若さを保つ秘訣ですよ。静かな闘志を胸に秘めた“侍”という感じの方でした。

PM 3 : 00

ヴァイオリン片手に1人の紳士登場。
あの演奏中の鋭く輝く瞳も、今は穏やかな笑みに隠れて別人の様。この紳士、ソリストの外山滋さんです。

由美子 ヴァイオリンはとてもデリケートな楽器と伺いましたけれど？

外山 そうなんです、ヴァイオリンの形は女性を模したといわれてましてね。女性と同じく、扱いが非常に難しいんです。日本は特に湿度が90%位まで上がる事がありますから、いい音を出すのは大変です。

由美子 とてもダイナミックな演奏法ですね。

外山 ええ、音楽は体で感じるもので、全身で弾いているなど感じられる時がベストです。運動神経と音楽とは、密接な関係があると思うんですよ。音楽やる人は、スポーツ好きが多いですね。僕も、野球、卓球、球つき、何でもやりますが、運動選手だった人の演奏法には、快感を感じる様なリズム感がありますネ！

インタビューが終ると、スカッとした身のこなしで、足早に控室へ入って行かれました。スポーツマンなんだナァー。

PM 4 : 00

ステージ上は、まだまだリハーサルの真最中。皆さん、真剣な顔つきで、スコアとにらめっこ。では控室の方へ移りましょう。あっ、制服姿の子供達が出たり入ったり、お休み時間かな。さて、先生はどこかな？ いらっしやっ。汗だくです。ちょっと、お話を伺ってみましょう。

由美子 渡邊先生、荒川少年少女合唱隊は結成なさってどの位ですか？

渡邊 16年です。今までの卒業生が450人位います。

由美子 皆さん、おいくつ位なのかしら…

渡邊 最年少が7歳で、中学2年までなんですが、今はそのまま残りたいというって高校3年の子がいます。

由美子 合唱隊の目標はどんなことですか？

渡邊 うちはどうな子もメンバーに入れます。集団の中で自分の意志を発表する。そして、皆と一緒に息づかいしていこうという事なんです。

卒業生にも“おじいちゃん”と慕われる渡邊先生でした。この後、合唱隊の女の子にちょっと聞いてみたら“音楽が一番好き”と、目をきらきら輝かせていました。とってもチームワークがいいんだなあ。



PM 5 : 30

コンサート開演1時間前。ホールではスタッフが最終点検に大わらわ。黒のタキシードに着がえた演奏者もちらほら…。心なしか、この控室のあたりにも緊張感が漂っています。私めも坐ったり立ったり、一番落ちつかない時なのです。

PM 6 : 00

開場。お客様がホールに入られる頃、控室の方では、演奏者、スタッフ最後の準備。

PM 6 : 25

ジリジリジリーン。5分前のベルが響きます。手に汗握る一瞬。

さあ、いよいよ秒読み。

まず、小ぢんな眺き窓から客席を…

わあ～たくさんのお客様。



ドキュメント 4月29日

春一番 Joyful Concert



PM 6 : 30

スタッフの合図でスタート。早川さんが、小さく頷いて微笑んでくださいます。

ハラハラドキドキ。一步一步マイクに近づきながら皆さんの顔を見廻します。今日はお子様連れの方が多いせいか、とっても、アットホームな雰囲気。紹介を終えて、暖かな拍手を聞きながら、「きっと、いいコンサートになるな」



とホッと胸を撫でおろすのです。さあ、早川さんの指揮による新ヴィヴァルディの演奏が始まります。シーンとした会場に、パッフェルベルのカノン、アルビノーニのアダージョ、皆さんもお聞きのとおり美しい弦楽器のハーモニーが流れます。心ふるわすパイプオルガンの響き。外山さんの哀愁を帯びたヴァイオリンの音色がほてった体にしみ渡ります。



小窓の向う側は別世界。

早川さんが音を操る魔法使いに見えました。初めてのクラシックコンサート。なんと感動的なのでしょう。

そして2部は荒川少年少女合唱隊の合唱。小さな子も大きな子も、こんなにも生き生きと伸び伸びとした表情で……。

忘れかけていた子供の頃の思いが、ふと甦ります。弾む心。輝く瞳。心に春を感じます。惜しめない拍手に、子供達も嬉々として戻ってきました。ここでしばらく休憩です。



PM 7 : 30

舞台裏では次の準備が始まります。

さ、今度は第3部。

山本さんの尺八の音色が、とても懐しい昔を思い起こさせます。続いて早川さんアレンジのビートルズナンバー。

尺八と弦の絶妙なハーモニーがなんとも心良い。軽快なビートルズナンバー、ただ、ただ、感激。本当



に音楽って素敵だな。

そんな事を思っているうちに、コンサートも終りに近づいてしまいました。場内の割れんばかりの拍手に包まれて、演奏者の方々が顔に汗を光らせ、戻ってきます。ほんとうに音楽って素晴らしいなあ。鳴り止まぬ拍手の中で



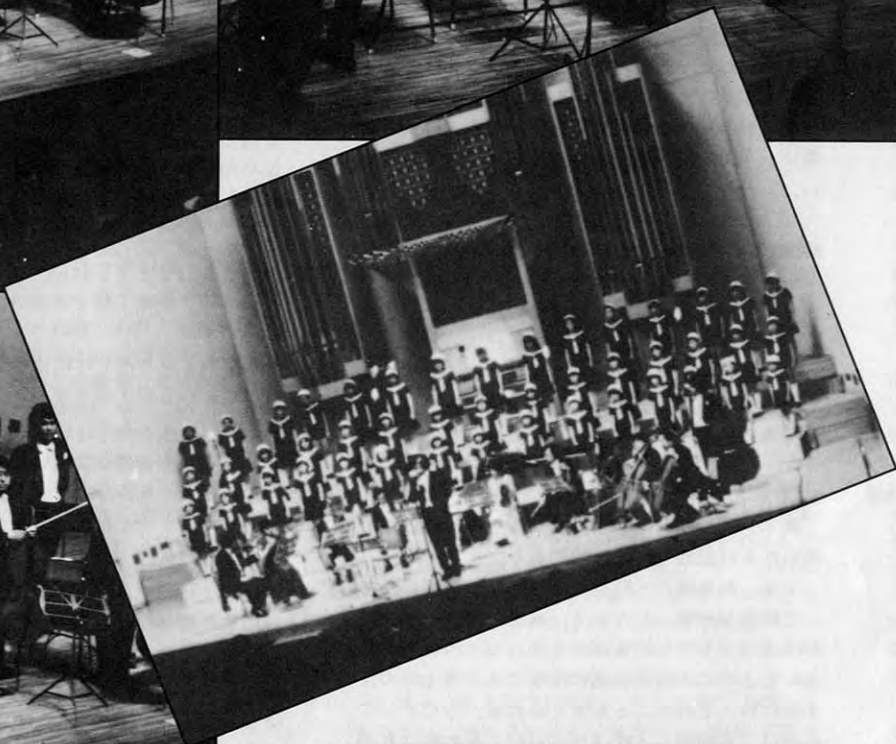
お客様も、演奏者もスタッフも一つの心で結ばれていたに違いありません。言葉では語りつくせない感動を胸にしっかり受けとめ心から拍手でもう一度、アンコールへ。晴れやかな早川さんの上気した笑顔。とても印象的でした。





ドキュメント 4月29日

春一番 Joyful Concert



PM9:30

コンサートが終って、興奮さめやらぬといった雰囲気のお客様にも感想を伺ってみました。
“今まで、クラシックのコンサートに行く機会がなかなか無かったんですけど、今日は子供連れでこられて良かったです。特に、なじみの曲のビートルズナンバーがクラシック風に聞けたのが楽しかったなあ”



PM9:40

さて、お客様の帰られた後のホールでは、機材を運び出したり、後片づけが始まっています。皆、さっきまでの険しい顔が嘘の様に、それぞれホッとした表情。

ここでミキサーの池田さんにお話しを伺ってみましょう。

由美子 今日、一番御苦労なされたのはどういうところ？
池田 ライブ録音はどういう状態になるかわからないから、バランスの取り方が非常にむづかしいですよ！

それから今日は、ワンポイントという録音の仕方をしてますから自然の音の雰囲気を楽しんでいただけたと思います。

とインタビューの後、最後の大事な、機材運びに戻られました。

コンサートって、ほんとに皆が一体になって頑張ってる出来上がるものなんですね！

驚きと感動の私の一番長い日ももう幕をおろそうとしています。会場の外は今までの熱気が嘘の様に、春のさわやかな風が吹いています。空に向かって、もう一度、大きく深呼吸。胸の中にジーンと熱いものを感じます。皆さん、お疲れさまでした。

素敵な一日を有難う！



曲解説目

SIDE 1-1 サムシング(Something)

ビートルズ後期のレパートリー、1969年7ヶ月にわたるレコーディングで完成したジョージ・ハリソンの作、同年発表のアルバム『アビー・ロード』に収録されている。

ビートルズはこの曲を69年秋に「カム・トゥゲザー」とカップリングでシングル・カット、11月末には両面ヒットの全米ナンバー・ワンを記録している。アメリカだけで175万枚、世界中で250万枚の驚異的レコード・セールスを残したこの曲は、「ホワイル・マイ・ギター・ジェントリー・ウィープス」とともに数少ないビートルズ時代のジョージの傑作として、その人柄をしのばせる繊細で優しいメロディが魅力である。ここでも新ヴィヴァルディ合奏団の演奏はニュー・アレンジを使用。

SIDE 1-2 ミッシェル(Michelle)

フォーク、ロック・バラードをベースに書きあげられたビートルズ中期のメロディアスな、レノン／マッカートニー作品である。彼ら65年発表のアルバム『ラバー・ソウル』に収録、当時日本ではラジオのヒット・バラードをにぎわせたが、アメリカではデビット&ジョンソンの作品のほうでヒットを記録している。

ビートルズ作品、歌詩の一部がフランス語で歌われているのはポール・マッカートニーの発案によるもので、ヒット曲ではないが「ガール」や「イエスタデイ」とともにスロー・ラブ・バラードの傑作として広く知られている。尚、ここでの新ヴィヴァルディ合奏団の演奏は新たな編曲によるものである。

SIDE 1-3 抱きしめたい(I Want To Hold Your Hand)

ビートルズ初期のレノン／マッカートニー作品。アメリカ、日本では64年発表のアルバム『ミート・ザ・ビートルズ』に収録、本国イギリスではシングルでの発売となった。

またアメリカでの記念すべきビートルズのシングル初ヒットがこれ、2月に全米ヒット・バラードでナンバー・ワンをマーク、イギリスでは150万9千枚、アメリカでは490万枚のレコード・セールスを記録している。

ビートルズ音楽のルーツは黒人のリズム&ブルース、ブルースなどが中心、ここではもっとも泥臭いゴスペル・ミュージックがもとになり、ハードなロックン・ロールが作られている。魅力はシャウトするヴォーカルと強烈なビートに全て語りつくされる。

SIDE 1-4 ノルウェーの森(Norwegian Wood)

65年発表のアルバム『ラバー・ソウル』に収録されているレノン／マッカートニー作品。後にジョンは“何故歌詩がノルウェーの森になったのか覚えていない”と語ったこの曲は、ビートルズ音楽にとってとても意義深いものである。というのはこの曲がビートルズ音楽とインド音楽の初めての接点となっているからだ。

ここで初めてジョージがギター・ソロの部分にシタールを活用して独特のメロディを奏でている。リズムも力強く、当時アメリカで流行のフォーク・ロックの感覚も感じさせ、ポップスとはいっても

細かな工夫、発想のユニークさをものにしたという聞きごたえ十分、隠れた傑作のひとつに数えられている。 [かまち潤]

合唱のためのコンポジション第4番「子供の領分」より

SIDE 2-1 ゆかいなうた／絵かきうた

二千数百曲にもものぼる今日の東京のわらべうたの資料を素材として、子供の合唱とオーケストラのためのコンチェルトとして書かれている（今日は、そのうち冒頭の部分をア・カペラで演奏します）。自分たちのまわりにある、あらゆるものを遊びの中にとり込み、生活のうたとしている子供のバイタリティーそのものが、この曲のテーマとなっている。

「東京のわらべうた」より

おじぎのまえに

やはり東京のわらべうたで、小泉文夫編「わらべうたの研究」に素材をとったもので、1975年ピアノ伴奏の児童合唱として書かれた「おてわんみそのうた」の第1曲である。子供たちの自然の姿がことばと音を通して浮きあがってくる。

「東北のわらべうた」より

ほたるこい

東北のわらべうたの一つで、その作曲のみごとしにより、ほたる（今日の東京ではなかなか見られないが…）の幻影を見る思いがする。ほたるの飛びかう美しい情景を描き出せる日本人でありたい。

SIDE 2-2 アヴェ・マリア

シャルル・グノー（1818～1893）は、歌劇「ファウスト」で有名なフランスの作曲家で、“アヴェ・マリア”は宗教曲にも力を入れていた彼が、バッハの平均率クラヴィーア曲集の第一巻第一番〈前奏曲ハ長調〉を伴奏に使って旋律をつけたものである。

SIDE 2-3 八木節

栃木、群馬、埼玉3県の境が寄り合った辺りで唄われる口説形式の盆踊唄である。

元来、群馬県の本崎宿に越後から出稼ぎに来ていた飯盛女が唄ったと云う（越後口説）一名「新保広大寺」くずしが盆踊唄となったとの説もあり、本崎とともに例幣使街道の宿場である栃木県の八木宿に移入されたことも考えられる。したがって当時は「本崎節」と呼ばれていた。八木節の名手として登場した人物は足利郡山辺村の朝倉清三という馬方で明治20年頃馬方として街道を流して歩いていた。その山辺村出身の馬方、渡辺源太郎は一代の美声家で、その唄は一名「源太郎節」或は「八木節」といわれ、全国的に流行をみた。かつては馬子等が、宿場での休憩時に空だるの底を叩いてうたったともいわれているが、結局は「八木節」として群馬県で生れた形になったものである。

SIDE 2-4 小諸馬子唄

長野県の浅間山麓地方の馬子唄である。元唄の「小諸出て見よ、浅間の山にヨー」の小諸は、むかし小室と呼ばれ、牧野氏の城下町であり、中仙道の宿駅であった。この小室を中心に、碓氷峠を越えて往来する馬子たちのうたった馬子唄が、三味線唄にのり、酒席の流行唄となり、それが再び本来の馬子唄として復活したという曲折をへて、現在の「小諸馬子唄」となったもので、同じ馬子唄でも小諸のものは洗練された旋律を持っていることで知られている。



何故ワンポイント 録音か……………

ワンポイント録音の特徴を説明する前に、クラシック音楽の姿を述べなければならぬと思う。クラシック音楽・洋楽の歴史は、音楽を必要とする場、最初は貴族の宮殿であり、民衆の教会での音楽であったのだが、音楽の多様化と楽器編成の増大化によって、又それを必要とする条件が生れて来たのも当然、人間の欲求の上から必然的なものであったから、次第に大きな演奏会場で大編成のオーケストラによって効果的(?)な音楽となっていた。しかしヨーロッパに於ける演奏会場が音楽よりも先に在存している場合、作曲者はその演奏会場の音響条件を考慮に入れなければならないかと想像できる。けれども音楽はそれ以前に作曲者・演奏者の精神性・感性が優先されていることは言うまでもないが、又上記の条件を完全に無視しては音楽は伝わってこないとも理解していた。つまりその演奏会場で表現できる最良の音楽を生み出すことが目的であり、聴衆に音楽に内蔵するものを伝えることが目標であったから、音楽は演奏者と演奏会場との融合したものであったから。聴衆はどのような席に座っていても音楽を平等に堪能できるように状態にあった。私の少ないヨーロッパの演奏会の経験からも納得するに充分であった。ウィーン・ムジークフェライン・ザール、国立歌劇場、パリの国立歌劇場、そこでは私が日本で賞味できなかった音楽が醸し出されていた。弦楽器の繊細さ、暖かさ、深さ、木管の音色の変化の微妙さ、金管の華やかさと明るさ、それに柔らかなさ、全体の融合した響の中でもそれぞれの楽器のニュアンス、個性は失われていない、それぞれを聞こうとすれば、その素晴らしさが確実にとらえることができた。これこそが本物と認識したのである。誰がどのような会場の席にいても音楽が聞ける、つまりこれがワンポイント録音の発想であると思われる。そこに、その会場に再現されている音響が音楽であるという認識の上になつて。

では何故今回その方法を取ったかと云うことは、新ヴィヴァルディ合奏団という古典曲を中心とした演奏団体であることに起因することは当然であるが、スタジオ録音と異なる音場空間を造って見ようとして取ってこの方法を選んだのである。そこには自然な音の定位、距離感、奥行き、楽器の音色のニュアンスが得られるとともにホールの特徴が表われるからである。マルチ録音、スタジオ録音では、確かに楽器一つ一つは判別ができるが、総べて楽器が平面に並んだに過ぎない状態となることが多い。その場合、演奏会場に響き合った楽音の豊かさ、それ以上に広がる倍音の世界がない、乾燥した音の集合体になってしまう危険性が多いのである。ある意味ではマルチ録音では不可能な表現さえある。

しかしながらこれらは総べて音楽が、演奏会場と演奏者、音楽の種類が一致したと云う前提がなければならないのである。ホール選択にも経験のない所ではいけないし、勿論良い響きでなければ

ならない。演奏者も演奏経験のある会場が望ましい。ワンポイント録音では個々の楽器のバランスについては演奏者任せなので負担が大きいか、録音する側はその音楽を完全に把握・熟知して適切な助言を、指揮者・演奏者にあたえなければならないとか、マルチ録音では編集作業で補えるものまで現場でクリヤーにしておかなければならないのである。それ以上に効果ある音楽会場が出来ることを目標にしてワンポイント録音にしたのである。

実際の録音会場では

録音は4月16日杉並公会堂で最初に行われた。あいにくの雨であったがホールの響には大きな影響はないようであった。新ヴィヴァルディ合奏団の他に、フルート、オーボエ、クラリネット、ファゴット、ホルン、ハーブ、パーカッションが増強され、早川正昭氏の新編曲によるビートルズの「ミッシェル」と「サムシング」が録音された。録音以前になすべきいくつかのことの中で重要な事柄は、副調と云うか、モニタールームの音響処理を施したその室の音を、自分の制作した自分にとっての標準テープを再生して、その認識を頭の中にたたき込んでおかなければならないことであった。ワンポイントでは特に重要なことである。そのモニタールームとスタジオモニター、いわゆる標準モニターとの差を考慮し、バランスをとり、最終的に良好でなければいけないのである。

ワンポイントと云ってもステレオ録音であるからベアーマイクでなければならない。私はノイマンのM—269と云う15年からある真空管式のコンデンサー・マイクロフォンを多用し、信頼を置いている。真空管の特色といえる楽器の輪郭が明確であること、豊かであること、ゲインが高いこと等からである。現在は製造中止され貴重品となっていることでも高名なマイクロフォンでもある。メインマイクロフォンの他に、ホルン、木管、ハーブ、チェンバロ、パーカッション、コントラバスにそれぞれの性格に合ったマイクロフォンを補助として立ててあるが、実際には使用しないマイクロフォンもある。エコーマイクロフォンは勿論SM—69である。同じビートルズの曲でも編成によっては、本来の意味のワンポイント録音した曲もあった。

4月29日は石橋メモリアルホールでのコンサートの日であったが、午後6時半開演前にリハーサルを兼ねた録音が行われたが、発想は杉並公会堂と同じである。同じようにマイクロフォン・セットした。しかしながらホールの違いをワンポイント録音では、このように大きな差を感じることは想像できなかった。演奏団体も同じ、マイクロフォン・セットも同じであるのに、このように伸びやかに演奏されるとは。東京荒川少年少女合唱隊のアカペラ(伴奏なしの合唱)では子供達の声の音域

とメモリアルホールの石の壁の帯域が共鳴して大きなパワーになって空気まで飽和しているように響いていた。録音でもその感じがリアルに表現できていると思う。それよりも子供達の声の清澄な美しさが魅力である。メモリアル独特の残響の長さもそれを増していた。

又杉並公会堂とメモリアルホールの地理的条件、環境の異差による暗騒音の違いが、私の認識の中にはあったが、それ程に影響がないと思っていたが、ワンポイント録音では、そこまでも感じさせる微妙なものであった。都会の中では自動車の低音とか、地下鉄の低音とか、それらが主原因になっているのである。時としてその他に雨・風が影響する場合もある。この二つのホールの暗騒音の差が判別できれば、ある意味での素晴らしい装置と云えるかも知れない。

レコードでは

「サムシング」は杉並公会堂の録音である。冒頭でホルンがフォルテで奏する雄大なスケール感、ワンポイントの特長が出ていると思う。この時ホルンには補助マイクロフォンは使用していないので自然な響で録音されている。他にチェレスタとハーブの距離感、クラリネットのメロディーとファゴットのオブリガートの対比、それに弦楽器も含めて、チェンバロとシンバルのリズムとチェンバロとスネアドラムのリズム差、オーボエ、クラリネットのメロディーと弦楽器のピチカートとの対比、ティンパニーのフォルテとピアノの音色の差がホール録音の特色として表現できている。

「ミッシェル」も同じく杉並公会堂の録音である。宇宙、星を表現するような、ヴァイブ、グロッケン、ハーブ、チェレスタ、タムタム(ドラ)、スターチャイム、コントラバスが音場空間にそれぞれに遠近間を持ってちりばめられている。その遠近間の差、楽器の音色の差がはっきりと認識できる。次に弦楽器が、左からファースト・ヴァイオリン、セカンド・ヴァイオリンのそれぞれのフルトが移動してヴィオラ、チェロと自然に右に広がって行き、オーボエのメロディーに流れていく。この弦楽器の微妙な変化もワンポイントの特徴であると思う。又、チェンバロが、ピアノと異なって演奏者の指で音量が加減できないので、撥弦する長弦を増加させて行くとともに音色が変化して行くことも聴きとれる。

「抱きしめたい」これは石橋メモリアルホールでの唯一の実況録音である。新ヴィヴァルディ合奏団と山本邦山の練習時にない演奏の良さが演奏会に出た例である。聴衆が居ると居ないとでは、演奏者の反応が違って来るのも当然であろう。それとは別にこの曲とB面の「八木節」「小諸馬子唄」との音場、響が変化していることに気付かれると思うが、同じ山本邦山の尺八でありながら、同じ弦楽器でありながら、会場に人が居る居らないではこれだけの響の差がはっきりと表われるのである。

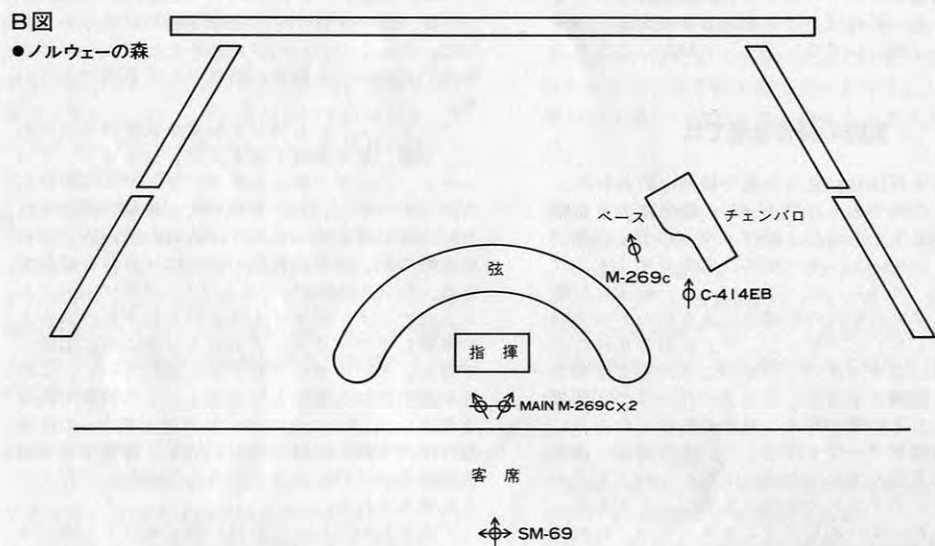
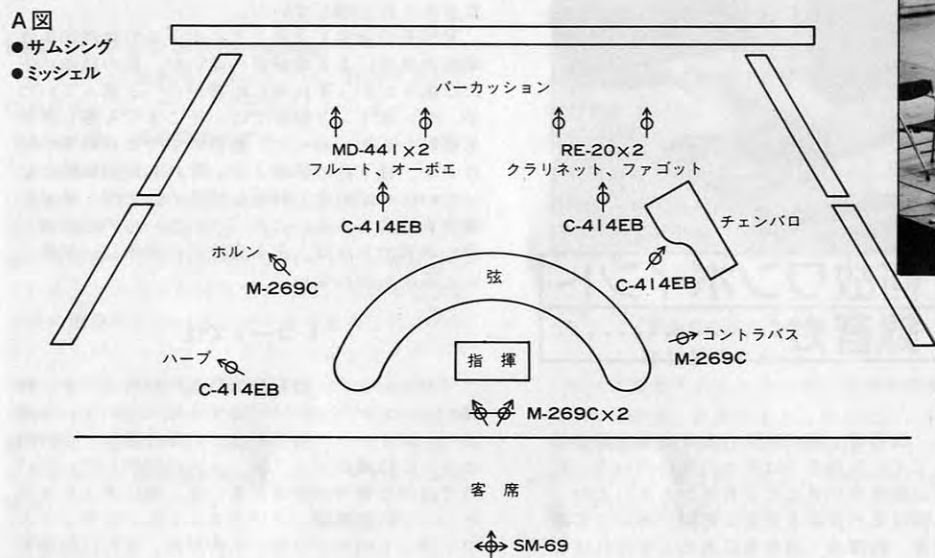
「ノルウェーの森」は杉並公会堂での本来のワンポイント録音で、素直な音色での、新ヴィヴァルディだけの演奏です。

「ゆかないうたーほたるこい」までの荒川少年少女合唱隊のみのメモリアルホールの録音は、いわゆるワンポイントとは云えない録音ですが、ソロと合唱との遠近間に、全体のホールの響きと、ハーモニーに注意を払って録音してある。

「アヴェ・マリア」はメモリアルホールの録音で合唱団の声を美しく、弦楽はあくまでも伴奏、自然のバランスで抑制された晴れやかな雰囲気になっている。

「八木節」「小諸馬子唄」もメモリアルホールで尺八は補助マイクロフォンを生かさずに十分にバランスのとれた楽器であり、スケール感もあった。弦楽器と融合した音楽になりきっていた。杉並公会堂に比べメモリアルホールでは低音が豊かに鳴って安定感を持っていた。又私は日本人なのだとなりに感じた次第であった。

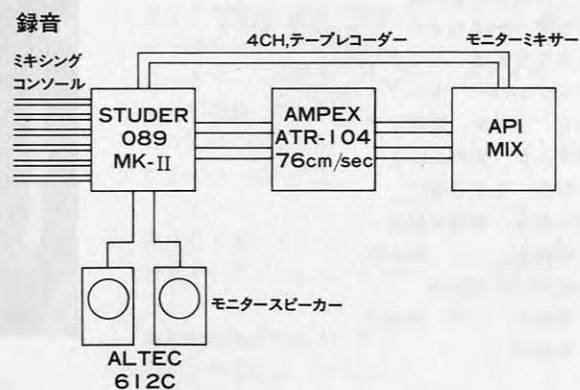
オーケストラ、楽器編成、マイク・セッティング (杉並公会堂 4月16日)



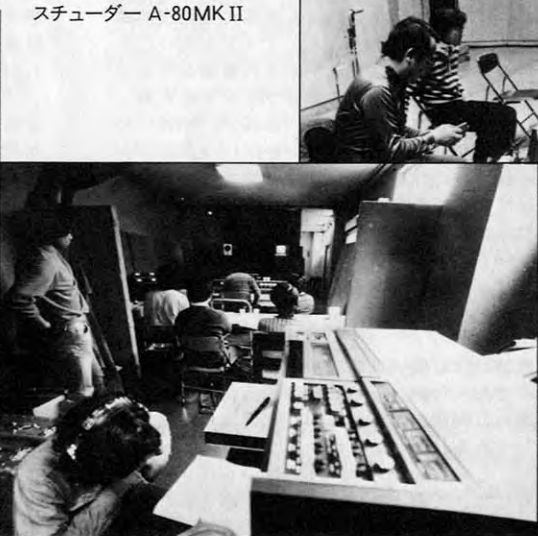
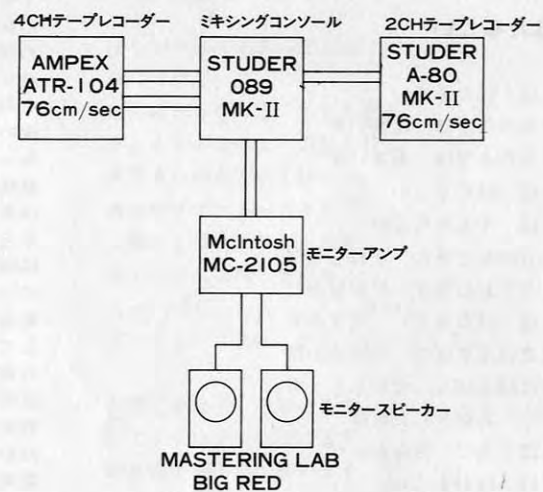
調整卓 スチューダー 089×2
 モニタースピーカー アルテック 612
 テープレコーダー アンペックス ATR-104
 スチューダー A-80MKII



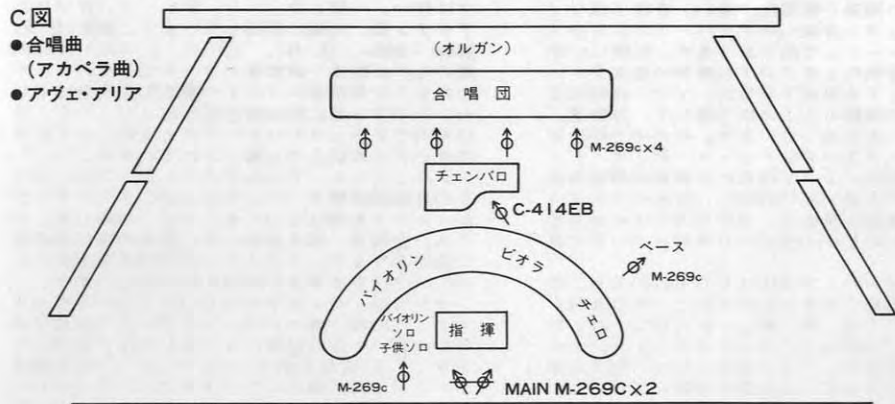
ブロック・ダイアグラム (杉並公会堂・石橋メモリアルホール)



編集



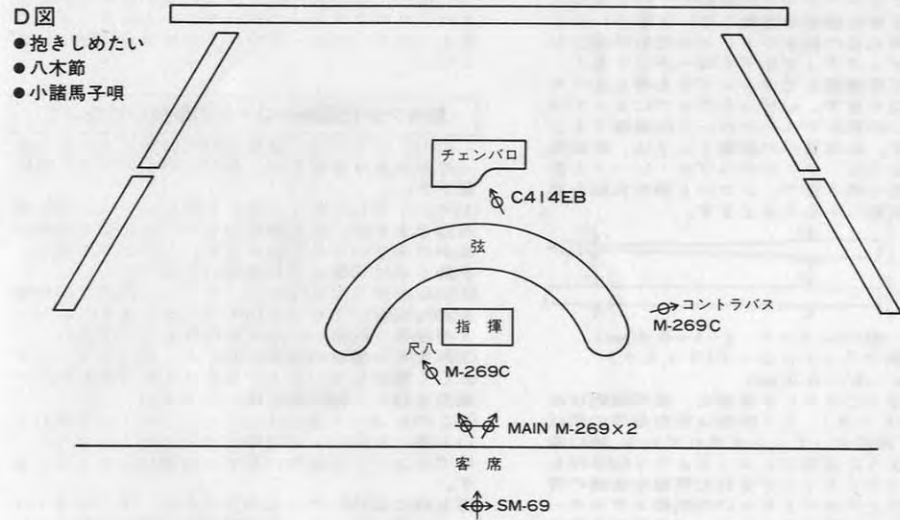
オーケストラ、楽器編成、マイク・セッティング(石橋メモリアルホール 4月29日)



※アヴェ・マリア…ソロ用マイク M-269CのみOFFになっています。又、合唱曲(アカペラ曲)はメインのM-269CがOFFになっています。オルガン曲については本レコードには収録されていません。

客席

SM-69



●写真は石橋メモリアルホールのマイク・録音器材類

■ DAMハイクオリティ・レコードについて

最近のデジタル・オーディオ技術とその周辺技術の急速な進歩でハード、ソフト共に著しく多様化しており、PCMテープ、デジタル・オーディオ・ディスク及びビデオ・ディスク等による新しい記録媒体の開発と実用化に伴い、多種多様なソフトテクニックと音楽へのアプローチの仕方が一段とエスカレートして来ております。同様にいかにより高い音楽性とオリジナル演奏の忠実なトータル・サウンドを完成させるか、ソフト技術以上に製盤技術の開発もここに来て厳しく、高密度、高品質化の一途を辿っています。その中で特にビデオ・ディスク及びデジタル・オーディオ・ディスクの開発技術によって得られた製盤の周辺技術とノウ・ハウを最大限に駆使し、従来のマスプロ的仕様とは性格の異なる、手作りのプロセスを経て製作されたものが今回のDAMレコードであります。

オーディオ・マニア諸氏はもちろんのこと、音楽ファンの皆様も年2回企画されているDAMレコードについては、常に新しい試みがなされ、前向きな姿勢で技術的テクニックとそのトーン・キャラクターを追求し、より忠実な音楽の再現を制作ポリシーとしている意図を理解していただいていることと思います。

そこで今回のハイクオリティ・レコードの特徴を述べてみます。

レコード(フラット・ディスク)形状

一般レコード形状は、音溝部を保護する為にレーベル部とレコード周縁部にグループガードをほどこして、音溝部が直接に接触しない様に厚くなっております。これが一方では、レコード再生条件や音質への影響を考慮した場合必ずしも望ましい形状では無いようです。

例えばa)グループガードの傾斜している溝部に再生針先が正規な溝壁面接触しないままトレースする為に、異状音の発生やノイズの発生原因となります。b)ピックアップを下す時へたをすると、針先が滑って音溝部までジャンプする事もありキズの原因となります。c)ピックアップによっては、カートリッジの底がグループガードに接触することもあります。d)音質への影響としては、断面形状から解るように、ターンテーブル・シートと音溝部の密着性が悪くなり、レコード個有共振を起こしやすい状態にあると云えます。

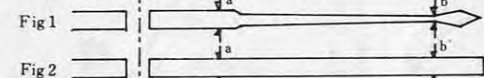


Fig 1 一般レコード a-b=0.6(mm)

Fig 2 新フラットレコード(ディスク)

a'-b'=0.2(mm)

御存知のようにステレオ音溝は、水平振幅は左右信号の和(L+R)、上下振幅は左右信号の差(L-R)として録音カッティングされており、特に本レコードのように通常のレコードより+5dB程もハイレベルでカッティングされた複雑な音溝の再生は、より以上のカートリッジの振動エネルギーでレコード盤を烈振させ、レコードの個有共振によって音質への影響が十分に考えられます。

共振はマスとコンプライアンスの積で表わされますから、レコードの個有共振はレコードを厚く重くすることでマス成分を増して共振を下げ、更にレコード平面均一性の精度を上げ、フラット面に形状変更することでターンテーブル・マットとの密着性を大幅に改善し、共振によるレコードとターンテーブル・マットとの間に起こるリアクションを緩和させる事を可能にしました。これにより今までに無いサウンド・キャラクターが得られ、特に中域から低域の分解能を一段とクリアーにして、そのナチュラルな響きはよりオリジナル・サウンドに近いものと確信しております。

ターンテーブル及びターンテーブル・マットの材質、形状によっても音質の変化があるように、レコード形状、質量によっても音質へ影響するファクターは充分考えられますが、今回のこのレコードは特に再生条件を考慮した上で新フラットプロフィールを採用致しました。

一般レコードとの比較

重量比	30%up
厚さ比	最厚部 15%up
	最薄部 65%up

更に偏心の要因の1つであるセンターホールとプレーヤーのセンターピンとのガタについて注目し、先ず市販プレーヤーのセンターピン寸法を調査してその結果でレコードのセンターホールの設計変更を行い、最小限にガタツキを減らす為にセンターホールの径を小さい方向に持って行きました。

■ クォーツ・ロック、厚手レコードについて

従来のシンクロナス・ダイレクト・モーターによる大振幅のカッティングでは、動的ワウ・フラッター(ダイナミック・ワウ)が少なからず音質に影響を及ぼしますが、今回の「DAM45」では、

高精度にサーボされたクォーツ・ロックD.D.モーターとダイヤモンド・カッター針を採用することで、ディスク・マスタリング時に於けるクォリティーを高め、以前にまして余裕のある音溝巾と大振幅にたえられ、たっぷりとしたビッチとディプスがコントロールされるようになりました。

現在のレコードは再生系機能のグレード・アップに伴い、一段とDレンジ、Fレンジ、及びリニアリティ等、大幅に飛躍しています。振幅(P-P)250μm~280μm、[L-R]、ピーク・レベル+20dB程度のもは数多く高密度レコード化しております。このような高密度レコードの溝波を完全にトレースする為に再生時の技術的ノウ・ハウ、及びそのテクニックがいろいろ考えられ、かすかすのオーディオ誌上でも論じられています。ヘッド・シェル、トーン・アームやターンテーブル・シートの共振問題等々……。たとえば、ターンテーブル・シートを例にとっても、ゴム、なめし皮、ガラス、金属等、変える毎にその音質の変化は確実に差があります。このように再生時の高忠実トレースにはさまざまな問題が残されています。

それでは、ディスクそのものはどうかと考えますと、一時期、薄いレコードはプレスでの塩ビ成形性が良いとされ話題になりましたが、レコードを厚くする(質量を増す)ことでレコードの共振を下げ、更に再生時のレコードとターンテーブル・シートとの間に起る共振を緩和させることで、中音域の分解能が一段とクリアーになり、特に深みの有る、伸びた重低音の再現とバランスされたダイナミックなパワー感をお楽しみ下さい。

この種のレコードは、特に安定度の高い盤質が必要とされますが、従来からのプロフェッショナル・レコードで開発した材料をベースに、新タイプの配合剤、熱安定性効果の高い安定剤の組合せにより、一層ゲル化性の改善を図り、また更に新タイプ帯電防止剤による静電除去効果ともあいまって極めて安定度の高い、この厚手レコードが生まれ、リアリティのよいダイナミック・レンジをもつオリジナル・サウンドの再現を可能にしました。

30センチ45回転レコードの取扱いについて

このレコードは、通常の33 $\frac{1}{3}$ 回転レコードと変わった点はありませんが、念のため次のことに御注意下さい。

- オートプレーヤー、オートチェンジャーでも使用出来ますが、ある特殊なものでは完全な自動演奏が出来ないこともあります。このような場合、手動方式に切替えてお取扱い下さい。
- 回転が早くなるために、レコードの反りの影響が33 $\frac{1}{3}$ 回転にくらべて出やすくなります。レコードの保管、取扱いには充分注意して下さい。
- 再生する部屋の温度が低いと、カートリッジが正しく作動しないことがありますのであらかじめ室温を15℃~20℃位に保って下さい。
- このレコードはハイレベルカッティングされている為、トレース時には針トビ、ヒリツキ、等でレコードを傷つけやすい切削状となっています。

再生時には特にアームのラテラル、インサイドフォースのバランス、及び再生針の摩耗状態、針圧(メーカー指定の重い方にセット)には充分気を付けて下さい。

レコード材質——プロユース材料使用

■ カッティング・データ ■

Cutting: TOSHIBA-EMI, LTD. GOTEMBA

Cutting Date: MAY. 11. 1981

Tape Recorder: STUDER A-80

Drive Amplifier: Neumann SAL-74

Cutting Lathe: Neumann VMS-70

Quartz Rock Motor

Cutting Head: Neumann SX-74

Non Limitter

Non Equalizer

■ スタッフ ■

編曲 早川正昭 A②B2.3.4

プロデューサー 小山正敏

ディレクター 鈴木武昭

ミクサー 中田基彦

カッティング・エンジニア 池田 彰

原 清介

山岸浩司

メンテナンス 伊藤 勲

フォートグラファー 堀田正實、林喜代種

デザイン 東芝EMI(株)デザイン室

録音場所 杉並公会堂S56.4.16

石橋メモリアルホールS56.4.29

企画・制作 第一家庭電器DAM

製造 東芝EMI株式会社

